

## モンテーニュにおける 現実認識と人間の発見

高橋 誠

モンテーニュ (Michel de Montaigne, 1533~1592) の思想は、その思想の発展が論理化されるとともに、はじめて、その全体性における展望を可能とする。これまで積み重ねられてきたモンテーニュ研究・解釈は、その思想の内部に現われたかれの思想展開が何を契機としてなされたか、その転換の論理は何か、にかんする解釈に規定されている、と考えられる。したがって、モンテーニュにおける思想の論理と構造は何か、という課題を解くことは、かれの思想の一回性・特質を決定して、その多岐にして豊かな全思想を構造的に把握する、という課題を果たすことに通じる。

従来のモンテーニュ研究は、『エッセー』<sup>(1)</sup>に現われたかれの思想が三つの段階を識別させる発展を示した、ことを一致して証認している。それにもかかわらず、かれのストア主義的・懐疑主義的・自然主義的 (第三巻時代) 思想諸段階が、どのようにして発生し、かれの思想がどのような論理に媒介されて発展を遂げたか、という問題については、さまざま異なる見

解を示してきた。その解釈の多様性は、モンテーニュ解釈の多様性に対応する。この意味において、モンテーニュにおける思想の発展の論理と構造とは何か、というモンテーニュ研究のもっとも重要な課題のひとつは、未解決である、といえる。

(1) ラドゥアンは、この発展の様相をもっとも簡明にのべている。「かれは、まず、しばしではあるが熱狂的に、人生の生き方を苦難や死を蔑視することを、自分に教えてくれるよう、ストア哲学者たちに求めていた。つぎに、批判的な検証の時代にあつて、かれは、人間理性の傲慢を挫くために、懐疑主義に訴えていた。第三のそして最後の傾向は、自己の確信へと向う。かれは、結論として、自然の哲学に執着するにいたる」と。René Radouant, *Montaigne, oeuvres choisies*, Librairie A. Hatier, 1934, pp. 265, 267.

(2) これら三つの思想段階は、モンテーニュがみずから傾倒した思想家からみれば、セネカ、ピュローそしてソクラテスの思想に対応する。『エッセー』の巻・章・年代による区分については、Pierre Villey, *Les sources et l'évolution des Essais de Montaigne*, Hachette, 2<sup>e</sup> éd., 1933, vol. I, の巻末を参照。

本稿の課題は、以上の二つの課題意識に基づいて、モンテーニュにおける思想の発展過程を論理化して、この論理を仮設的に提示することである。<sup>(3)</sup>

(3) モンテーニュのテキストは、つぎの版に依拠し、以

下、引用は、すべて (II-12, 699) のような略記号による。  
 (II-12, 699) は、この版の 'Livre II, Chapitre 12, p. 699' を指示する。 Michel de Montaigne, *Essais, texte établi et annoté par Albert Thibaudet, Bibliothèque de la Pléiade*, 1950.

一 現実認識とストア主義・懷疑主義

モンテーニュの思想は、かれ自身の現実認識の構造それ自体から発展の契機を与えられ、〈妄断 (présomption) を否定するといふ志向〉の弁証法的な展開をとおして、発展を遂げる。そして、この発展過程を貫く中核的な範疇は、理性概念とこれと相関関係にある自然概念とである。

〔モンテーニュの現実認識〕 モンテーニュが思索を開始してから死にいたる時代のフランスは、宗教戦争 (1562~1593) という、中世なるものの拒絶にかけた、人間の全生活領域にかかわるあらゆる階級闘争に貫かれている。

改革派は、終始、信仰の自由をその要求としてかかげ (一五七二年、サン・バルテルミイの大虐殺を機に、政治的自由の要求がこれに加わる)、あくまで信仰のために闘った。この観念のための戦いは、しかし、観念のための戦いとして顕現した、その基底にある階級のための戦いである。<sup>(4)</sup> 宗教戦争の歴史の意味は、信仰の争いに沈澱していた階級の争いの意味のうちにある。ユグノー戦争は、したがって、いわゆる封建的危機を迎えた後の階級的再編成の時代に相即し、新興・旧領主階級とこの

階級からの経済的独立を企図する農民・手工業者たちとの階級闘争なのである。神の問題がすべてに優先した時代であるとはいえず、もし、物質的な利害の要求に把持されずに、信仰の自由の獲得が戦いの全動機であったとするなら、おそらく、三十年にわたるあの熾烈な闘争をかれらは戦いきれなかったであろう。

(4) この点、ドイツ農民戦争 (1524~1525) と同じ性格をもつ。cf. エンゲルス『ドイツ農民戦争』、マルクス・エンゲルス選集、第十六巻、大月書店、pp. 17, 22, 25, 29

(5) cf. 高橋幸八郎『市民革命の構造』お茶の水書房、昭和三年、pp. 102~114. 封建的危機の原因のひとつ、価格革命については、大塚久雄『近代欧州経済史序説』上の一、弘文堂、昭和三年、pp. 32~34, 45~47. フランスの場合、商人・上層市民は、産業資本の担い手となることなく、多く、寄生地主・土地貴族に転換する。モンテーニュの曾祖父、Ramon Eyquem (1402~1478) は、その一例である。

(6) ユグノーの階級構成は、これまでのところ、かならずしも明確ではない。しかし、一五六〇年頃にはカルヴァン派教会の会員数は、一〇万あるいは三〇万、ナントの勅令の頃には、一二〇万、といわれる (松田智雄『宗教改革』至文堂、昭和三十六年、pp. 163, 171) 事実からみても、ユグノーのほとんどは農民・手工業であった、と推定される。カルヴィニズムの浸透した階層は、第一に、手工業

者・商人である(マックス・ウェーバー『プロテスタントイイズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫、上、p. 29。手工業者については、cf. Henri Hauser, *La modernité du XVII<sup>e</sup> siècle*, Félix Alcan, 1930, p. 32)。第二に、農民(高橋幸八郎 op. cit., pp. 116~119)である。当時の産業形態は半農半工を支配的としたから、手工業者は同時に農民であった。ガイゼンドルフ作成の「一五四九―一六〇年にジュネーブに亡命したプロテスタント」の分布図、および、サミュエル・ムール師作成「一五六二年におけるフランス改革派教会分布図」(『世界の歴史』筑摩書房、九、pp. 228, 233)は、工業の発達の早い北フランスに劣らず、農業の優勢な南フランスにも、カルヴィニストが密集したことを明らかにしている。

他方、十六世紀フランスは、この宗教的階級対立の間隙を縫いあるいはこれを利用して、王権が中央集権的国家統一へと確実な歩みを進め、アンリ四世の即位(1589)に始まる絶対主義の準備期にあたっている。

階級対立をその基底としたルネッサンス、宗教改革、絶対主義への移行などの一連の社会的文化的政治的激動は、神学的形而上学が生のあらゆる領域をその支配下に収めていた中世への、全時代的な対決、そして、その克服の過程なのである。古い価値観にとつてかわるあらゆる新たな価値体系の出現をいまだみていないこの現実が、どれほどに深くかつ広く振幅したかは、モンテーニュ自身がこれに鮮やかに伝えている。しかも、この動揺

は、社会的な次元にのみ限定されることなく、人びとの内界をも深く貫いた。

(7) フラゲがそうしたように、かれには「時代の描出者」という評価をも与えることができる。cf. Emile Faguet, *Seizième siècle*, Boivin, 1893, pp. 407~413.

この複雑な現実に対面したモンテーニュは、理性を、旧教(Ⅱ自然)に自己を捧げる〈神的自然的理性〉と、なんらかの意味で旧教(Ⅱ自然)から乖離するかこれを否定する形で行使される〈人間的理性Ⅱ妄断〉(présomption)との二範疇(理性の二重性)によって把握することによって、この現実をその理性観に基づいて整序する。すなわち、第一に、この現実を〈神的自然的理性〉・〈妄断〉の両理性の対立に集約させ、新旧両キリスト教の対立として規定する。第二に、陰謀と流血と死との間断なき継起である宗教戦争・社会的無秩序の原因を、〈妄断〉に、そして、この〈妄断〉によってうみ出された新教主義に求めた。このことは、モンテーニュが「ルネッサンス人」であることの一つの指標を提供するであろう。

(8) (9) 拙稿「モンテーニュにおける“Présomption”の概念について」『一橋論叢』第五二巻第一号。cf. 拙稿「モンテーニュにおける理性の二重性とその現実認識の構造」『一橋研究』第九号、一九六二年、p. 27。後者の小論における、『レモン・スポンの弁護』を資料として再構成されたかれの現実認識は、その枠組はかわらないとしても、いくつかの訂正部分をもつ。しかし、そこには必要最

小限の資料は提出されている。

モンテーニュは、十六世紀の社会的無秩序がこの〈妄断〉に起因する、と判断する。この判断はつぎのようになされる。第一に、宗教改革・社会的無秩序をひき起こしたのは、人間の傲慢(orniel)であり、第二に、この傲慢を基礎づけるのは、〈妄断〉である、という論理がこれである。

〈妄断〉は、モンテーニュにとって、人間の本质である。したがって、この〈妄断〉を起因とする宗教改革・社会的無秩序は、人間の自己自身の対象化である。他方、この無秩序は、多くの人びとに「罪、病、迷い、困難」「不安、悲しみ、野心」(II-12, 506, 538) などの悪徳を呼び起こしたばかりではなく、多くの人びとの多量な流血と死をもたらしている。ここでかれは、人間たちが神の名において自己の利害を正当化して得た果報がみずからの苦悩とその生の脅威であった、と洞察する<sup>(10)</sup>。自己の対象化がひびいて自己を否定する。

(10) この発想は、かれの現実認識に織り込まれた三つの既成の発想法、スコラ哲学(↓理性の二重性)、キリスト教、ストア哲学に由来するそれらのうち、後二者に依る。旧教に反抗すれば罰せられる、というより旧約的な発想、反自然は苦悩の原因である (Les Stoiciens, textes choisis par Jean Bruin, P. U. F., 1957, pp. 98-99, 101) とする発想がそれである。後者が支配的である。

すなわち、かれは、かたくなな不寛容とおびただしい流血のうちに集約的に表現された現実の姿を、〈妄断〉による傲慢を媒

介とした人間の自己否定〉として定着した。

この現実認識は、一五七五年以後一五八〇年以前のかれに特有のものではなく、終生、かれが抱き続けた現実認識である。かれは、一五八六―一五八八年に書かれたエッセーで、(b) この度の戦いもまた、自己に対立して、自己自身の毒によって、自己に噛みつき、自己を破壊する。それは、本来的に悪意に満ちかつ破壊的であるから、自己を滅ぼすと同時に他をも滅ぼし、狂乱によって自己をひきさき、ばらばらにする」(III-12, 115) とのべている。このテキストは、〈妄断〉を「自己自身の毒」と換言して、かれの現実認識がなお〈妄断〉による人間の自己自身による自己否定にある、ことを明示している。現実認識の核を形成する〈妄断〉は、この意味において、モンテーニュを現実には媒介する接点なのである。

モンテーニュのうちには、この現実認識を獲得すると同時に、主体的にして積極的な思想の営為に働く基本的な作動因がうまれる。〈妄断〉による傲慢を媒介とした人間の自己否定から人間を解放するという、〈妄断〉の否定・除去への志向〉がそれである。この場合、この志向は、かれがおそらくは無意識のうちに留保して行使する、批判的理性の作為である。

モンテーニュは、現実を認識し、その認識に基づいて現実に向きかける用意を完了する。

現実認識の構造から必然化された、〈妄断〉の否定・除去への志向、の発生は、すでに、かれの思想があらたな段階に到達したことの明白な指標である。この段階にいたって、かれの思

想は、第一に、ストア主義的思想傾向をすでに克服し、第二に、懐疑主義に傾斜している。

〔ストア主義と懐疑主義〕 モンテーニュにおける支配的なストア主義的思想傾向は、理性的な思惟の鍛練・「死のじや meditation」(I-20, 110)によって、ストア哲学のいう宇宙の合目的性を認識し、この認識によって、現実からたえず迫まる死の脅威を克服する、という現実から強いられた所産である。したがって、その思想の特徴は、ストア主義の追思惟とその既成倫理の実践とによって、現実をたいして受身に対峙しこれを乗切る、と、主観性・受動性にある。

(11) cf. 『ハッセー』第一巻第一四・二〇章。

(12) cf. ヘーゲル『小論理学』松村一人訳、岩波文庫、上、pp. 134-142.

しかし、ストア主義によるこのかれの受動性は、逆に、現実をあるがままに観察する透徹した眼をかれに保障する。現実には、死の脅威を克服するという目的のために、モンテーニュという主観のうちで、繰り返し反復されて生起するにいたったからである。現実をたいするこの受動性は、たとえそれがより直接的受容であるにせよ、同時に、あるがままに現実を受けられる豊かな受容性たりえたのである。

このストア主義による追思惟を媒介として現実へのリアルな対面を許されたモンテーニュは、第二巻第十二章『レモン・スポンの弁護』にいたって、現実に対決を迫まる姿勢をあらわにする。この受動性から能動性への転化は、現実の全認識行為に

よって可能とされた。つまり、この転化の契機は、現実認識の獲得であり、そして、その転化は、〈妄断の否定・除去への志向〉の発生である。この志向は、現実を働きかける対象として設定する。ここで、かれの支配的なストア主義的思想傾向・特徴は、克服され、同時に、宇宙の合目的性に基づくストア哲学の自然観は、〈妄断〉の対概念として、かれの思想の基底に沈着して、〈妄断〉を否定する論拠に、そして、それによってかわるべき実体に化していく。

(13) それの否定によって実現される、〈妄断〉の対概念・〈神的・自然的理性〉は、ストアの自然哲学にレモン・スポンの『自然神学』などが加わって、規定されている。

この志向は、一方で、ストア主義的傾向を克服し、他方で、懐疑主義の受容を用意する。モンテーニュが懐疑主義を受容しえた根拠は、〈妄断〉を否定する、という激しい志向の発生にある。かれにとっての懐疑主義は、第一に、判断の中止、理性批判であり、第二に、かれが希求する〈自然〉に通ずるその倫理学の内容・アタラクシーである。この懐疑主義の形式と実体とは、かれが抱いた志向にまったく合致する。したがって、  
「(b) わたしは、何を知るのか」(II-12, 589) というかれの懐疑主義の命題は、この志向・課題の至上性を証する証言にはかならない。その懐疑主義的傾向は、〈妄断〉を否定・除去する、というかれの志向がそのうちで具体化され顕現した形態である。ここで、その志向の緊迫度は、懐疑主義にその具体化をみて、いよいよ高まる。この緊迫感の濃密化に相即して、他

方で、ストアの自然哲学・倫理学、レモン・スポンの自然神学に系譜をもつ、自然即神というかれの自然観は、〈人間化〉の過程に入る。この過程が、かれの思想発展の最後の過程である。

(14) ルソーの学芸批判に類似するモンテーニュの学芸批判は、この論脈内において、同じく、〈妄断の否定・除去への志向〉に由来する。<sup>6)</sup> 拙稿「モンテーニュとルソー——その学芸批判の比較検討——」『一橋論叢』第五一卷第三号。

## 二 自然の人間化——〈第三巻時代〉——

この志向は、懐疑主義を媒体として、さらに展開を遂げて、あらたなそして最後の思想段階へかれの思想を導く。モンテーニュの最後の思想は、概略、より客観の領域にかかわりこれを整序する〈経験的相対主義〉と、より主体の領域にかかわる〈人間の自然の内実〉とに、分析的に区分することができる。以下は、検証の主要な対象を後者に限定して、議論を進める。

問題は、モンテーニュの思想がこの〈妄断の否定・除去〉をどのような構造において契機として最後の発展を遂げるのか、である。したがって、問題は、さらに、〈妄断〉の否定が遂行される〈場〉はどこに設定されるのか、そして、その〈場〉での〈妄断〉の否定は何を結果するのか、ということになる。

〔妄断を否定する場〕モンテーニュは、〈妄断〉を否定し除去しなければならぬ、という課題をみずから課するとともに、現実への主体的な働きかけの用意を完了した。しかし、か

れがそこで〈妄断〉を否定し除去する現実の〈場〉は、すでに、不可避免的に規定されている。すなわち、それは、自己自身のうちに設定される。その場を具体的な社会の領域内に獲得することとは、かれにとって、本来的に不可能なところみであった。

これが不可能であった理由は、第一に、現実を新・旧両キリスト教の対決としてかれに整序することを許した理性概念の、その機能の限界のうちにある。モンテーニュが規定した一方の〈神的・自然的理性〉は、旧教の信仰真理の論証と自然とに服する理性であり、人間の理性は、この限定された使命を荷うときにのみ、有効的に発現する、とされる。理性をその二重性において把握したかれは、おそらく一五七六—一五七八年頃には、〈妄断〉の否定によって〈神的理性〉の実現を企図し、それによる社会的無秩序の救済を意図するには意図した。しかし、この理性は、それによってあらたな時代のあらたな現実を認識し救済するあらゆる可能性を、現実の側から奪われていた。豊かな受容性を誇る鋭敏なモンテーニュは、この理性の有効性の喪失を直覚していたはずである。

ここで、〈神的・自然的理性〉のうちの〈神的理性〉は、かれの思想内で、欠落してゆき、〈自然的理性〉に包摂される位置に転落する。

他方の〈妄断〉は、第一に、すべての認識能力を奪われており、第二に、それにとどまることなく、人間自身を否定する。

そして、これが、モンテーニュの眼に映じた現実であり、その現実認識の核を形成した。かれにとっての〈妄断〉は、ひたす

らな否定の対象でしかありえなかったのである。

(15) cf. 拙稿『モンテーニュにおける“presumption”の概念について』『一橋論叢』第五二巻第一号。

モンテーニュがみずから与えたこれら理性機能の限界は、逆に、みずから行使する批判的理性の機能を拘束するにいたる。〈妄断〉を否定する場を自己自身のうちに設定する、という第二の不可避性は、ここに由来する。すなわち、旧教の支配を脱する時代の激変と、特にこれを投映してみずから行なった人間の本質〈妄断〉規定とに厳しく規制されて、かれは、ブルタルコスに依拠して、全存在を永遠に動揺・流転する認識不可能な存在と規定せざるをえなかった、ということである。かれはいう、「(a)……われわれの存在にも、諸事物の存在にも、いかなる恒常的な実在もない」(II-12, 679)と。ヘラクレイトスに淵源するこの思想は、モンテーニュにいたって、それら流転する諸存在を貫くロゴスという範疇を失っている。かれにとつての神は、永遠の彼方に隔絶した存在だからである。そのため、かれは、事物の流転を、完結した一箇の体系として捕えることも、これを固定することも許されずに、ただ、認識不可能なもの、と規定するほかなかった。モンテーニュにおける人間は、この一五七〇年代の後半はもちろん、「第三巻時代」においても、ルネッサンスの指導的イデオログ・エラスムスにおける人間と同じく、未知の前に、驚嘆すべき世界の前に、立たされていたのである。<sup>(17)</sup>

(16) モンテーニュにおけるこの神の観念は、その人間理性

の観念とともに、カルヴァンのそれに等しい (cf. ジャン・カルヴァン『基督教綱要』中山昌樹訳、新教出版、第二篇、pp. 229, 243, 244, 第三篇、p. 45) ののもっとも基本的な発想の根の一致は、両思想家の同時代性を示すとともに、両者が生きた時代の性格を顕示するものといえる。

(17) Bernard Groethuysen, *Anthropologie philosophique*, Gallimard, 1952, p. 264.

これは、かれが社会を社会それ自体として捕える認識方法を欠いたから、というより、いまだ、十六世紀フランスがこれを可能とするほどにその社会認識に必要とされる範疇を十分に顕現しなかったから、である。以上の二つの理由はここに淵源する。

このとき、社会的無秩序の救済——個としてのモンテーニュにとつての課題だけではなく時代のそれでもあった——が、人間それ自身の、〈妄断〉の否定・除去による自己変革によって遂行されようとするのは、かれにとつての避けえない手続であった。こうして、かれは、限りなく自己のうちに後退し、かれにとつての至上命令である〈妄断の否定・除去〉を自己自身のうちで遂行する。

〔無知・無能の告白〕モンテーニュは、みずからの無知・無能を告白していう、「(a) まことに、無力のためか、無頓着のためか、わたしの魂ほど、このような多くの通俗的な、そして、恥らひなしには知らずにいられない事柄にかんして、無知で無能な魂はない」(II-17, 737)と。その具体例として、計

数力の欠除、自国の通貨・穀物をはじめとした諸知識の欠除、を指摘する。その理由は、役に立つとかれ自身が認める記憶力が「(b) わたしにはまったく欠けている」(II-17, 733) からであり、たとえそれがあるにしても、その結果にすぎない「(a) 記憶が、わたしにとって、その思うままに役立っているにすぎず、わたしの必要に応じて役立つのではない」(II-17, 734) からである。記憶力、理解力にかぎらず、一般に、「(a) わたしの精神は遅鈍である」(II-17, 736) と断定する。それゆえ、かれは、後年にいたって、「(c) わたしが知りうるもの、わたしがなしうるものとして責任をもちうるものは、ほとんど何物もない」(II-17, 715) と付加しなければならなかった。こうして、かれは、自己の本来的な無知・無能を告白する。

この確信に満ちた告白は、『レモン・スポンの弁護』(II-17) の段階における、そのような自己の実現を期待する無知・無能への憧憬から、かれの思想があらたな段階に到達したことを指示する。

たしかに、『レモン・スポンの弁護』の章においても、モンテニユがこの無知・無能に生きる自己の実現を意図したことは、明白に看取される。しかし、この章における「無知・無能」と、このあらたな段階におけるそれとは、その荷う意味において次元を異にする。すなわち、前者における「無知・無能」は、『妄断』に対極する概念としてこれに対置された、宗教的な価値の実体という意味を支配的とし、かれにとっては、

より客体的な概念にすぎない、という傾きが強かった。「無知・無能」のこのあらたな蘇生は、モンテニユという個体の内部から、それが主体化された証である。

ここでそのあらたな意味を明らかにする前に、無知・無能の自己告白がどのようにして可能とされたのか、を問わなければならない。

〔自己自身からの妄断の除去〕 無知・無能の自己告白をモンテニユに許したものは、『妄断』の自己自身におけるその否定の遂行であり、その告白は、これの結果における確認である。

かれはこれを証言して、「(a) わたしがこれをいうのは、わたしの魂を非難するためである」(II-17, 736) と確言し、あるいは、「(a) わたしは、機会が訪れてわたしを強制するにいたるまで、懐疑と選択の自由を留保する。それに、真実を告白すれば、そのときでも、わたしはひとのいうように、筆を風の赴くにまかせ、自己を運命のなすがままに委ねる」(II-17, 736) と告白する。この確言と告白とは、いずれも、『レモン・スポンの弁護』における『妄断』を否定する場が不特定の、しかし、それを否定し除去するという激しい志向の、直線延長上に位置する。ここで、「わたしの魂を非難する」あるいは、極限まで「懐疑と選択の自由を留保する」というのは、その特定の場である「自己自身」を得て、確信をもって『妄断』の否定を遂行したことを確認させるほかの何ものであるか。かれは、抱束されたが、しかしなお、留保しておいた、みずからの



批判的理性(↓)へ妄断の否定・除去への志向)をもつて、(妄断)の行使をみずからに極限まで禁じ、これを客観化し、それを自己自身から除去した。このときはじめて、かれは、人間の無価値性を強調する思想への同意を許され、すべての人間の等質性を確信し、たとえば、『カンニバルについて』(I-32)『後悔について』(II-12)などの章を書きえたのである。

無能の告白は、'imagination' に置換されうる(妄断)の除去された自己の、また、無知の告白は、'presumption' に置換されうる(妄断)の除去された自己の、その結果における確認である。〈妄断〉を否定するという激しい志向は、その向う場が不特定であったがゆえに、『レモン・スポンの弁護』の段階では、宗教的な価値実体としての無知・無能への憧憬・勧告を支配的としたのたいし、その否定・除去を確かに実現しうる特定の自己自身という場を得たいま、その志向は、無知・無能という特定の個体内において、そして、その無知・無能の告白において、その志向を推進するという批判的理性の作業は完結する。

この段階にいたると同時に、経験への信頼、事物の相対性の認識が、確立される。

〔自我・人間的自然的発見〕 無知・無能なる自己の告白は、さらに、自我の発見を懐胎する。これは、自己告白という方法によって客観化された実体としての人間個の自覚である。この自覚過程は、〈妄断〉の否定を遂行してきたモンテーニュの批

判的理性が、無知・無能の告白においてその使命を終るとともに、(自然的理性)(人間のうちに宿る自然に仕えるために行使される理性)へ合体して行く過程に、そして、自然即神といふかれの自然観が凝縮して人間化される過程に、対応する。自我・人間的自然的発見は、かれの批判的理性がこの(自然的理性)に化感する、まさに、そのはじまりを記す指標である。

それならば、無知・無能なる自己の告白に宿される自我・人間的自然的確認は、モンテーニュによって、どのように証言されるのか。

かれは、自己告白を指示して、いう、(a)……わたしが何を知らせるにしても、わたしがあがままの自己を知らせるかぎり、わたしは成功したのである」(II-17, 737)と。この強い自己主張をかれに許した基本的な要因は、〈妄断〉を否定するというその現実認識に由来する不可避性である。しかし、この文脈には、この不可避性に還元することの不可能な積極的な意味が託されている。なぜなら、そこでかれは、「あるがままの自己を知らせる」自己告白に、「わたしは成功した」という積極的な価値評価を与えるから、また、「(a)自分をほとんど評価しない」がゆえに「わたしは、正しくかつ健全な思想をもっている」(II-17, 741)と強い自己肯定を行なうから、である。自己告白へのこの価値評価は、自己のうちに実現された無知・無能がかれの内部で価値実体として定立された、ことの確認である。

ひとは、その自我確立の初期段階において、自己の自己自身

にたいする関係を意識化する。モンテーニュの場合、それは、自己告白という方法による、自己の客観化という過程を経てなされた。したがって、かれにとっての自己自身は客、観的な考察の対象に設定される。かれはいう、「(a)世間の人びとは、つねに、自己の正面をみる。わたしといえは、わたし自身の内部に眼を注ぐ。わたしは、わたし自身だけを問題とする。わたしは、わたしを、考察し、検証し、吟味する」(II, 17, 723)と。かれにとっての自己自身は、自己がそのうちで思想を営む場、という関係をかれにたいして結ぶにいたる。客観化された自己自身は、以後、かれがそのうちから思索の糸をひき、たえず、その思惟を回帰させる源泉となる。

しかし、この段階における自我・人間的自然の自覚・発見をもって、個体としての自己がその置かれたある特定の社会と結ぶ諸関係を、それによって統一的に把持するものの個体内における確立、とはいえない。モンテーニュには、この段階での自我・人間的自然をもとに、これの個別化と普遍化、深化と拡大、とのヴァリアシオンをおして、〈経験的相対主義〉との関連のなかで、自己の生の合理化を完了する、という最後の作業が残される。この作業は、『エッセー』の初版(1580)に書き加えられた第三卷全十三章の構想とその執筆(1588-1589)によって果たされる。

無知・無能なる自己が価値ある実体であり、本来の自己であ

る、というこの段階におけるモンテーニュの確信は、〈妄断〉の除去された跡に残された、これ以上に否定しえない赤裸々な自己を、唯一の価値実体として客観的に認識しえたことの指標である。それは、自我を発見し、その実体である人間的自然を認識したモンテーニュの、あらたなそして最後の思想段階の指標である。

要するに、モンテーニュの思想は、その現実認識の構造に内在する論理・〈妄断の否定・除去〉を契機に、弁証法的な展開を遂げる。かれは、〈妄断〉を否定・除去するといふみずからの志向に忠実に服し、まず、ストア主義的思想傾向を克服し、懐疑主義を媒体として、つぎに、自己の無知・無能の告白という自己否定を完了する。この告白において、その志向は充足され、同時に、みずから行使する批判的理性は〈自然的理性〉に化態する。そして、方法としての自己告白によって自己自身の客観化を許されたかれは、自我を自覚し、その自我に宿された価値としての人間的自然を発見する。それは、十六世紀が所与としてかれに与えた、より抽象的かつ一般的な、自然即神という自然観の〈人間化〉され主体化された証である。ここに、モンテーニュは、〈第三卷時代〉に開花する人間的自然の豊かな果实を約束される。

(一九六四・七・一) (一橋大学院学生)